

エッセイ

たかが川柳されど川柳（五）

上野 一彦

遙かなる穂高

中学生のころ、学校の行事の一環で初めて八ヶ岳に登った。硫黄岳のハイマツの斜面で、なんでこんなところに来たのだろうとすくむ脚に、高所恐怖症の私は山などであれば避けて生きていこうと心に誓った。

そんな誓いもどこへやら、怖いもの見たさというか、馬鹿と煙は高いところに登りたがるというか、世界遺産の富士山も高校時代に登ったし、スイス三大アルプスもアイガー・メンヒ・ユングフラウ、マッターホルン、そしてモ

ンブランも、フランスのシャモニーも、おおよそペタンコ靴でいける山々は制覇した。山ならぬ江の島の平和塔も、東京タワーもスカイツリーも人並みに経験した。

高齢者の仲間入りをしたころから、散策と称しハイキング、トレッキングとだんだん体力維持のためにエスカレーターし始めた。尾瀬なども何度か足を運んだが、木道はよしとしても、三条の滝は一度の経験で十分。それでも至仏山や焼ヶ岳などもそのうち挑戦したいと、弱まりつつある記憶と学習力のなせる業か口走ってみたりする。

そうした仲間のなかに中学時代からの親しい友で本格的な山男があり、これがすこぶる付きの好人物。会うと日本百名山の話や家族での山歩きの話とかがよく出てくる。そうこうするうち、初心者を穂高につれていく会のようなものができ、一生の思い出に一度ぐらいはと完全に巻き込まれてしまった。しかも僕に穂高を経験させたい、山小屋の予約も天候を見てすべてやってくれるというという親切に手足の生えたような計画なのである。

まずは日程調整、たった一泊なのに天候のよいときでなければというので梅雨明けの七月の下旬から八月にかけてまず一〇日間予定を空けた。しかし、やむなき夏の研修依頼など、前後がだんだんやせ細り、たった一泊なのに天候不順でついにトライのチャンスは潰えた。友人は八月の一〇日頃に、独りで登り、来年こそは私の穂高行を実現しようと言ってくれた。

作家井上靖曰く『私の山は、穂高だけである。ただ穂高だけである。』（『槍、穂高連峰』：あるつく社）なんていう言葉にしびれながら次回のチャレンジを待った。

歳と共に、一年の経つのが早くなってくることを実感する。かくして私の穂高行は翌年に持ち越されたのだがついに実現した、とは言いながら、天候は昨年よりはましと



朝日に輝くマッターホルン ツェルマトのホテルから

は言いながらやや不順、不慣れな私にとってはそれが幸いしたかというか、途中、涸沢ヒュッテで足止め(最初からそのあたりまでは何とかと思っていたのだが)、小雨ぱらつくなか下山してくる人々を見て、早々ヒュッテで同室の方々と宴会となった。

上高地から明神、徳沢、横尾と歩き、分岐点の横尾から大橋を渡って横尾谷へ入り、そこから登山道を登って涸沢まで登る。涸沢は奥穂高岳・北穂高岳のベース基地になる場所で、皆さんの会話は「ここからどちらまで」なのだが、私の場合は、「残念だがここまで」なのである。

それでも天候のせいでやむなく、といった雰囲気は支配するなか、もう少し行けたのという気持ちもないではなかったが本音としては十分満足であった。

穂高岳は、奥穂高岳(標高三二九〇m)を主峰として、涸沢岳、前穂高岳、北穂高岳、西穂高岳、明神岳などからなる穂高連峰の総称で、岩峰が並び立つ日本のアルピニズムの聖地と呼ぶにふさわしい名山とガイドブックにはある。まあ、その前線基地までたどり着いたのであるから何をこれ以上望むべきか。

未経験者にはふさわしくない完全武装の上、天候によってヒュッテに留まった理由もあるわけで、少なくとも



わずかに残る雪渓をもっともらしい装備で踏破

一人前の顔だけはしていた。「一度穂高の絶景を見せてやりたい」と同行してくれた友人は、いささか不満げではあったが、わたし自身は感謝感謝の重ね餅でもあった。

翌日、用意万端整えた雨具を羽織り、再び雪渓、ガレ場を横切って下山となった。のぼりはただ必死だったが、下りはなんだか下半身に力が入らず、水滴でメガネも曇り、ふわふわした感じのなかで二度も転んだ。一度など抑えが利かず、ザックの重みで体が降られ、道を踏み外し、ひとりで這い上がれずもがくなか、後続の方に引っぱり上げてもらったという醜態も演じた。

世界最軽量という自慢のヤッケは破け、ザックに入れてあったカメラも破損、山はのぼりより下りの格言、身をもつて経験した。河童橋の手前のパンガローの陰で着替え、友人が「山で美味しいコーヒーを飲ませたい」とわざわざ持参した道具で入れてくれたコーヒーはやや薄かったが、それでも十分満足できるおいしさであった。まさにもつべきものは友である。

【おまけ】

私の穂高行の二週間後、娘夫婦の居るフランスへ行ったのだが、この穂高での下山経験を活かせず、パリのオペラ

座近くの地下鉄の階段を一〇段ほど前向きに踏み外した。調子に乗って地図を見ながらというのがよくなかった。メガネで顔を切ったの出血、海外で初めての救急車搭乗となった。今となっては想い出話だが、振り返るとゾツとする。それにしてもそれだけで済んだのは悪運の強さである。かくして私の七〇歳の夏は終わったのである。

たかが川柳 されど川柳 (平成二七年上半年期)

一月

再現は二百ではなく八百回 (佳作)

「スタップ細胞はありまます」から「魂の限界」まで。ノートがなければ嘘八百だって。早く忘れたい思い出でのひとつです。

百円で世界平和も祈願する (金メダル)

初詣でのお賽銭、たった一〇〇円で、家内安全から役満祈願のついでに世界平和も。神様も大変ですね。

タイマーが点いて頑張るウルトラマン

子ども心にかラタイマーが点いてからのウルトラマンの獅子奮迅の活躍に、もっと早くからがんばればと思っ

いましたが、還暦を過ぎカラータイマーがついてからよく理解できるようになりました。

【題詠】ひとり

一人がいいでも二人はもつといい

標語みたいとか。場合、場合といわれそうですがただの足し算以上のような気がします。人は社会的動物なのだから。

独り身は気楽と云って背をむける

強がり言ってもその態度、所作にどこか寂しさがにじむ。独身の方でも、妻に先立たれたお年寄りでも、そんなところありませんか。

冬の夜夫婦それぞれ一人鍋

二人でひとつの鍋を突くのではなく、それぞれに独身の鍋をというところにおかしさがあるように思っています。

二月

忙しい口にする退職後

ヒマになったとたんに「忙しい」の連発。なにもしなくていいという実感が受け入れがたく怖いんですね。

体力と金のかからぬ趣味残り (佳作)

必然そうなっていく。これこそ正しく賢い高齢者の生き

方なのではないでしょうか。持続は力ということわざを裏証するついでに。

宣告と聞こえる税の申告が

だんだん税の重みが増してくる。確定申告。自動ソフト。そろそろ老人を解放できないものですかね。老人を大切にしない国はいけませんね。

【題詠】進化

PCの進化は僕をウラシマに (佳作)

何とかついていこうとするのだけれどPCは玉手箱。うっかり開けると、あっという間に歳をとりそう。パーシヨンアップって本当に必要なの。

遺伝子のわずかな進化子に願う (銅メダル)

これは親のかすかな願いです。進化なんてしなくてもいいと思いつつも、せめて子どもだけはわずかな進化をと、それが親の願い。

人の世の進化退化は誤差の内

進化と言って胸を張り、退化と言って嘆くとも、所詮たいたしたことじゃありません。長い悠久の歴史から見ればみんな誤差の範囲。

三月

花粉症見逃しません年寄りも (佳作)

昨年あたりから鼻がぐずぐず。今年は目もかゆい。歳とると花粉症にならないと信じていたけれど。花粉症に苦しむ家内に、「ほくも花粉症になったみたい」というと、「そんな甘いもんじゃありません!」

桜待つ桜咲く咲く桜散る

散る桜残る桜も散る桜 たしが良寛和尚の辞世の句という説もあると聞きました。こんな句作ってみたいと思っていました。咲く咲くで満開のイメージなんです。桜でなくても、梅でもバラでもいいという御仁がいましたが、待つのも桜、咲くのも桜、そして散るのも桜なんですよ。

へそくりで妻は自分の墓を買う

サラ川ですね。愛妻ぶりを読んでも受けないので成りすまし。私は家内と二人で選んだ骨壺替わりの水差しにふたりで入るのが夢です。

題詠「息」

喘息で返事したのに無視される (銅メダル)

言いかえすなんてとんでもない。『できればしたくないな』『あーあ、ほつとしてよ』の気持ちを込めたため息も、家族の前では無視されがち。

ママ溺愛坊ちゃまついに虫の息

過干渉という言葉が使われ始めたのはいつ頃からでしたっけ。大切にママの愛情をたっぷり注げば、お坊ちゃまお嬢ちゃまは弱弱でやっと生きてる虫の息というわけ。

「子息と云われ思わず周りみる

「子息はどつしていらっしやいますか」なんて云われて、「はてそんなものいたかな。家にいるのはすねかじりのバカ息子」なんていう情景です。

四月

医者と飲む酒は薬とエリカ様

はしこ酒すれば体調は悪くするでしょうね。その上、本会議はお休みして温泉旅行。三日やったらやめられない議員稼業。浪速のエリカ様。こんな国会議員を持つ国民の不幸。

ぼく野党妻は与党で安定し

家庭では妻子が与党で、オヤジは野党。政権奪取とか、クーデターなど端から諦め、愛される野党になることが、世界平和ならぬ家庭平和の極意。

この咳は心の湯きからきて

ふだん健康な人が風邪などひくと結構心配。鼻水もいやだが咳はなお苦しい。そんな時、空気よりも自分自身

の心の渴きなんて自虐的な気分に戻りたくなくなるのはややナルシストなんでしょうか。

題詠「揺れ」

老いらくの針振り切れる恋したい

老いらくの恋？危ない危ない。だからこそ川柳の世界で自由に遊ぶのです。揺れ、地震計、針といった連想から激しい恋を、格好よく「針振り切れる」なんて表現してみました。

ブレないが口癖だったはずなのに

「俺はブレない」が唯一口癖のような信条だったのに。世の中の徒然に、つい揺れることもある。それもまた人間反省力のあるうちはまだマシよなんて自分を慰める。

この揺れは地震じゃないぞ脳卒中

もしかして、倒れる時はどんな思いなのかな。そんなことを考えること自体がエイジングそのものなんです。ぐらりと来て、地震かなと思って、いや違う、そんな感じかなと予行演習。

五月

五月病高齢者にも蔓延し

新入生、新入社員はゴールデンウィーク明けになると

辞めなくなるのが五月病。高齢者も例外ではなく、終活のなかでの自分探しに彷徨うもの。これも一種の五月病か。

引き留めてくれると信じもう辞める (佳作)

見境なく「辞めるー」と口走る人もいるが、多くは誰か引き留めてくれそうだという空気を信じて「もう辞める」。揚句、「どうぞ」と言われ引つ込みがつかなくなってしまうたケースを知っている。

家庭でもストレスチェックして欲しい

昨今、企業では社員のストレスチェックが精神衛生として大切だといわれる。それは会社だけでなく、いや家庭こそストレスチェックをしたほうがいいかもしれない。でも原因が分かった時が怖い。

題詠「待つ」

あなた待つ募る気持ちの貯金箱

愛しい人を待つ。あったら何をしよう、何を話そう、そうした気持ちがどんどん募っていく。それが募る気持ちの貯金箱。あの若い頃の自分はどこにいったのだろう。もう一度あんな貯金をしてみたい。

いつまでも待つわ地獄の入り口で (佳作)

一生懸命生きてはきたが、どれだけ多くの人を傷つけてきたことだろう。墓まで持って行かなければならぬこと

だつて決してひとつふたつではない。聖人君主でないとい

ればぎつと、俺もそしてあいつも天国は遠い。だけど二人

ならそれも待ち甲斐のあるもの。

待つが花遣えば喧嘩の腐れ縁 (佳作)

逢えばどつして喧嘩になるのだろう。親しすぎ愛おしすぎての喧嘩。これが腐れ縁なのか。でもまた逢いたい。そんな二人の気持ちを読んでみました。

六月

FIFA役員賄賂のバスを見破られ (銅メダル)

スポーツと賄賂、縁なさそうでもそうでもない。オリンピック誘致などでもいかにもありそう。子どもたちに夢と希望を与えるイベントだけに残念。

いつかまた今度そのうちあの世でね (佳作)

いつかまた、今度そのうち、社交儀礼だが、歳をとるとそんな悠長なことは言っていられない。ばやばやしているとすべてあの世での再会になってしまいそう。

携帯を忘れた日こそ安慮日 (佳作)

なければ不便なことは分かり切っているが、すっかり忘れた時、あきらめてしまえばそれなりに静かで平和な時間が流れていくこれこそ安慮日。

題詠「増」

ぼっちゃりが好きの言葉に甘い (銀メダル)

実は世の男性、歳と共にぼっちゃりが好きになるといふ。その比率四八%とか。だからと言って怠惰な生活は体重を一気に増やす。

よい別れ重なることに色香増す (佳作)

そうなんです。恋は女性を美しく輝かせる。それが恋に終わったとしても、良い恋は重なるたびに、充実した女性へと色香を増すのです。そんな役割演じたいものです。

つれなさを想い増させる憎いひと (佳作)

恋い焦がれ、そんな気持ちを知ってか知らずか、つれなさいそぶり。いつそ諦めてしまえばよいのですが、それが恋というもの。わかっていても憎いあんちクショウ。